

日本は19世紀後半に西洋から美術を受容したが、

概念やジャンル名をかりつて実態を変容させてきた。

これには日本に固有な歴史的背景に基づくのだが、美術史研究ではこの実態解明が進んでおり、本シンポジウムはこれらの成果やポストコロニアル状況以降の世界の実勢に照らして、その語彙や分類など包括的に

美術概念を再構築しようとするものである。

11月の福岡での成果を踏まえて、議論を深め、展開する。

アップデート

アッピーディート

## 1～3の課題を翻訳と変容という観点から捉えかえし、デジタル・テクノロジー以後の時代に

美術をどう把握するのか、その方法、領域、問題意識を模索する。

このため、美術以前の造型意識の有りようを探り、アジア地域における美意識とその体系化を検証する。

ここでは、それらをアジアでの美の原存在の検証や19世紀ヨーロッパにおける

日本美術の「発見」とその認識がうんだものの検証によって、

その具体相とそれが孕む課題を浮かび上がらせようとする。

これに基づけば、美術の近代が抱え込むことになる問題状況の大枠を

確認することができるであろうし、さらには近代以降に「美術」が受容された地域において、

展開させたことの基盤を捉える議論に発展させることもできる。

それこそはグローバリゼーション下における「美術」にとって、

もつとも喫緊の課題とせねばならない。

# 日本における 「美術」概念の 再構築

アップデート

2014年12月6日(土) 午前10時～午後5時30分

会場：金沢美術工芸大学 視聴覚室

北澤憲昭(女子美術大学教授)

植松由佳(国際美術館学委員)

福住廉(美術評論家)

白川昌生(作家)

加藤弘子(東京都現代美術館・学芸員)

住友文彦(アーツ前橋・館長)

2014年12月7日(日) 午前10時～午後5時30分

会場：金沢21世紀美術館シアター21

森仁史(金沢美術工芸大学柳宗理記念ザイン研究所長)

並木誠士(京都工芸繊維大学教授)

渡辺俊夫(ロンドン芸術大学教授)

山梨絵美子(国立文化財機構東京文化財研究所・企画情報部副部長)

P・D・フレーレス(フィリピン大学ヴァルガス美術館館長)

稻賀繁美(国際日本文化研究センター教授)

主催：科研共同研究「日本における「美術」概念の再構築」

共催：金沢美術工芸大学、金沢21世紀美術館

後援：美術中学会、明治美術学会

問合せ先：金沢美術工芸大学研事務局 tel.076-262-3653  
email:kaken@kanazawa-bits.ac.jp  
<http://kanabi-kaken.info/research01/symposium/>

ユーストリーム中継を予定：<http://ustream.tv/11fp>

美術の現場と美術館の現場における分類闘争のライブ・レポートである。



# 「美術」概念の再構築

翻訳と変容

アップデート

この研究は「美術」概念と、それにかかる分類のアップデートを目指しており、この結果「美術」の専門語としての位置を覆すような根本的な再編をも予期している。例えば、現在の日本では、しばしば「美術」に代わって「アート」が用いられているようだ。○美術品の分類はその収集とともに、古今東西において必要とされてきた。美術品の分類は、これまで——たとえば「絵画」の下位に「日本画」と「洋画」が配置されるような——体系性をもつものであり、美術史も、おむね体系的分類にしたがつて叙述してきた。しかし、今日のデジタル技術を用いた検索は、かつてのような体系性を必ずしも要さないし、また、検索者各人の体系性が並び立つような事態も想定される。このため、各種の分類が互いに正当性を主張する「分類闘争」(P·ブルデュ)が頻発する状況の到来も予想される。このような分類の変化は、どうせん分類観の変化を生みだし、アロー図式、セミラティクスのような新たな分類の在り方が注目されはじめている。○博物館学も美術史と同じく体系的分類を基礎としているが、新たに「美術」の名のもとにアヴァンギャルド、オルタネイトが次々に台頭することによって、従来の体系によつては「美術」の現状を捉えきれなくなつてゐる。○こうした状況を踏まえて、このシンポジウムは、「美術」諸ジャンルの分類と、「美術」というジャンルを問題化し、今日的視点から、そのありうべき姿をさぐることを、第一の目的としている。○「美術」という日本語は翻訳を介して19世紀末に造語された。それは16世紀以降のヨーロッパ文明の東漸の成果であり、西洋は政治、経済の世界制覇に基づいて分類闘争でも勝利したのであつた。しかし、「地方固有の知」(C·ギアーツ)による分類が消滅したわけではなく、造型の現場に生きる者たちは両者の生み出すモアレのなかで創作にいそしんできた。植民地では、解放によつて国民国家形成が進められたので、この創造の桎梏は解放後に顕在化した。いわゆるポストコロニアル状況である。○「地方固有の知」は、例え日本における「日本美術の特質」(矢代幸雄)といった発想から主張されたように、本質論的な固有性に由来するものではなく、東アジア文化圏の交流や海のシルクロードによるインド、アフリカそして西欧との交流のなかから形づくられたのであり、他の地域でも同様であつたに違いない。異なる言語の間の交流は単に語の置き換えにとどまらず、文化自体の翻訳受容を必要とする。すなわち、語の背後にある語彙の構造もしくはそれを成り立たせる分類のスタイルの翻訳である。語彙という体系的(系統的)分類を成り立たせる概念と概念の関係づけの在り方の相互理解が必要なのだ。○コンピュータ利用は限りなく分類体系を相対化してしまつたが、検索が語を用いる限り、その背後の語彙と語彙を成り立たせる分類のスタイルを無視することはできない。このような観点に立つたとき、美術における分類はどのような変貌を遂げるであろうか。